

多田謡子

反権力人権基金

News

No.4

2010/07/01

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2009年12月12日

第21回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2009年12月12日、東京・お茶の水の総評会館で第21回多田謡子反権力人権賞受賞発表会を開催し、今年度も70名を超える皆さんが参加してくださいました。

発表会では今年度の選考経過を報告した後、受賞者である、移住労働者と連帯する全国ネットワーク、辻井義春さん、上関原発を建てさせない祝島島民の会から講演を受け、基金より多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が各受賞者に贈られました。(詳細は2,3面)

発表会のあと、同じ会場で恒例のパーティが行われました。

資金の枯渇から、賞金を10万円に減額して運営してきた多田基金ですが、2009年度は年度途中

に大変高額額の寄付があったこともあり、各受賞者に20万円の賞金をお渡しすることができました。無名の弁護士の名を冠した小さな基金をたくさんの皆様のご支援下さることに、基金関係者一同、心から感謝いたします。

自民党政権が崩壊し、民主党政権が生まれましたが、普天間基地を「最低でも県外に移設する」とした鳩山首相はアメリカの意志と沖縄県民の板挟みのなかで退陣し、市民運動出身の菅新首相は、アメリカの意志を沖縄に押しつけると公言し、財務官僚の意を体して消費税10%を公言する始末です。反権力人権基金はまだまだ存在し続ける必要があると思います。闘い続けるすべての人々に心を寄せて、多田基金は本年も12月11日、第22回受賞発表会を開催します。(詳細は4面)

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第21回受賞発表会

2009年12月12日 総評会館（東京・お茶の水）

移住労働者と連帯する 全国ネットワーク

（移住労働者・外国人の権利獲得の闘い）



移住連の共同代表である大津恵子さんは、1980年代以降、来日して定住する外国人が増加し、各地で支援するためのNGOが誕生したこと、1996年に第1回「移住労働者と連帯する全国フォーラム」が開催され、翌97年に「移住労働者と連帯する全国ネットワーク（移住連）」が結成された経過を報告しました。現在、移住連には88の団体と約330人の個人が加盟して、政策提言、権利擁護、情報発信、交流などの活動を行っています。

大津さんが所属している日本キリスト教婦人矯風会が1986年に設立した「女性の家HELP（ヘルプ）」は、国籍を問わず、在留資格を問わず利用できる女性のための緊急避難施設です。そこでの経験をもとに、大津さんは日本に働きにきた移住女性の多くがうけている権利侵害の実態を述べました。

アジアからの移住女性の多くが、結婚した日本人男性から深刻なドメスティックバイオレンス（DV・家族からの暴力）の被害にあっています。支援をはじめた当初、警察は保護された女性が少しでもオーバーステイ状態にあると、暴力を振るった男性ではなく、女性を逮捕するようなことがおきました。子供とともに逃れてきた女性がオーバーステイ状態だったため、乳児と無理矢理引き離されたケースもありました。大津さんは、「女性の権利保護より入管法が先行しているのかと主張して、現在は改善されている」と述べました。国際結婚では、結婚するために来日した女性と、労働力、従属物としか見ない男性の意識に深刻な違いがあると指摘し、観光ビザが規制される中で、偽装結婚によって来日する問題も大きくなっていると指摘しました。

働きに来る女性たちは「日本に行けば月に10万円稼げる」と言われます。10万円はタイでは4～5ヶ月分の収入にあたります。渡航のため多額の借金を背負わされた女性たちは、日本に着いたとたん、パスポートなどすべての持ち物を取り上げられて地

方の温泉街などに送られ、売春を強要されます。売春を管理する元締め「ママさん」を女性たちが殺す事件が全国で数10件も起きていますが、これは彼女たちがどれほど悲惨な目に遭っているかを示しています。幸いにも逃げることができた女性が「HELP」に駆け込んできます。「HELP」の電話番号だけを頼りに、電話番号のほかは何も知らないで連絡して来る女性がたくさんいます。「HELP」はそうした女性たちが帰国できるよう、帰国するまで安心して暮らせる場所を提供しています。

米務省が毎年発表している人身売買報告書で、日本とロシアは人身売買対策が不十分な国と評価されていると指摘した大津さんは、被害の防止、救済と保護、加害者の処罰を盛り込んだ実効性ある法律の制定、24時間対応の多言語ホットラインなど、被害を予防し被害者を支援する運動の確立をめざして頑張っていきたいと述べました。

辻井義春さん

（国労組合員で唯一のバッジ着用者）



普段はほとんど着ないという普及の襟に国労バッジを着け、国労のマークが入ったネクタイ姿で登壇した辻井さんが配布した資料には、2002年に国労が組織としてはバッジ着用をやめて以降、ただ一人組合バッジ着用を続けたため会社から受けた処分と賃金カットの一覧がありました。57行に及ぶ一覧は、減給ではじまり、出勤停止1日、3日、5日と重くなり、2008年からは一番重い10日の出勤停止が発令されています。

「東海道線戸塚駅で国労の分会長をしていたとき分割・民営化が強行された。その時、組合員だったため新会社に採用されなかった2人の仲間のことを忘れることができない」と話した辻井さんは、些細なことに言いがかりをつけられ、不採用になった若い仲間と泣きながら酒を飲んだこと、彼らのことを思うと、国労バッジをはずす気持ちにはどうしてもなれないできたと話しました。また、「辻井は絶対に首にしてやる」と豪語した駅長が、辻井さんに採

用通知を放り投げたことも忘れないと語りました。

2000年、国労横浜支部の申し立てに対して、神奈川県労働委員会が、「組合バッジ着用を理由にした不利益処分は不当労働行為」という決定を出し、会社が社長名で、「今後このような行為を繰り返さないことを誓約します」という謝罪文を職場に掲示して、減額した賃金を返却したことに触れて、辻井さんは「一度は謝っておきながら、その後もバッジ着用者に攻撃を続ける会社は許せない」と述べ、有利な命令を勝ち取りながら闘いに活かすことができず、会社と一括和解してバッジ着用を放棄した国労の機関にも問題があると指摘しました。

「最初から、絶対にはずさない決めて闘ってきたわけではない。どうしてもはずすことができず、頑張ってきた結果が今までの闘いになった」という辻井さんは、2008年、一番重い10日間の出勤停止が発令され、あとは解雇しかないという状況に置かれてきました。「首になるかもしれない状況は重かった。下の子供がまだ学校に行っている。首になっても、何とか金をかき集め、子供だけは大学に行かせよう。そのあとは何とか夫婦で食べていこうと話した」と述べました。そして、「分割・民営のとき、仲間を裏切れないから国労は抜けないとかみさんに言った。その時のことをかみさんは、だって、あのとき私が何を言ってもおとうさんは自分の道を行ってほしいと言う。今は、おとうさんが許しても私は会社を許しませんと言う。ほんとうに感謝している」と、発表会に同席していただいた奥さんへの感謝を述べました。

一度は拒否された定年後の再雇用を約束させ、2010年2月に定年を迎える辻井さんは、今後も、闘わなければ命も健康も生活も守れないことを、闘いを通して明らかにしていきたいと述べました。

上関原発を建てさせない 祝島島民の会

(上関原発反対運動)



遠く、山口県から来ていただいた「上関原発を建てさせない祝島島民の会」代表の山戸貞夫さんは、まず地元テレビ局が報道した、9月10日以来の、埋め立て着工をめぐる現地の緊迫した映像を紹介し、工事着工のブイを強引に投入しようとする中国電力に、自然豊かな瀬戸内海で、漁船に乗り体を張って抗議する島の人々の様子が映し出されました。

1982年に原発問題が持ち上がってから27年間、なぜ、反対運動が続いているのかについて、山戸さんは、祝島の漁師にとって、予定地周辺の豊かな漁場がなくてはならないことは確かだが、さらに、島の目の前わずか4キロの場所に原発が建つことに、漁師だけでなく農民も含めて島ぐるみで反対してきたと述べました。戦後3000人いた島民は減り続け、反対運動を開始した当時の1300人から現在は500人足らなくなったが、現在の島民には、いったん島を出たものの、島の暮らしが忘れられずに帰ってきた人々も多く、島に対する思いが強いと述べて、「島の人々が、島に居りたい、島で暮らしたい」という運動だからこそ、分裂することもなく闘いが続いてきたのだと述べました。

当初、漁協の幹部や議員など有力者が取り込まれて賛成に回ったが、原発に招待された漁協婦人部のメンバーが、あまりに綺麗すぎる施設、立ち入り禁止区域ばかりの施設に疑問を持ち、帰りのバスで「原発反対」を決めたこと、生活のため原発の下請け労働に出たことのある人たちが、「あんなものは作らせてはいけない」と、経験を通して反対したこと、遊漁船で釣りに来た広島釣人から「原発が出来たら来ない」と言われたことなど、闘いの発端となったエピソードを紹介し、取り込まれた幹部など1割をのぞいて、島民1300人の9割で組織した運動は、現在は集団合議制となり、重要なことは全員集会で決めながら続けていると、穏やかな、ユーモアのある、そして自信に満ちた口調で述べました。

祝島周辺は自然の宝庫で、天然記念物のカヌムリウミスズメは、世界中に生息する5000羽のうち2000羽が周辺に生息すると思われるなど、貴重な自然が残されています。山口県下を中心に自然を守る市民運動が原発のための埋め立て反対の運動を進めており、原水禁（この中心は自治労ですが）と祝島島民の会、さらに、シーカヤックに乗った若者たちも加わって、任務を分担しながら闘いを進めている様子を報告した山戸さんは、「荒天と不幸のあった時以外、毎週続けてきた島民の会のデモは1051回になった。闘いを開始した当時40代の働き盛りだった人々も皆70才を超えたが、闘いは思い詰めてもしょうがない。役割分担もでき、闘いに広がりもできて、本当に止められるかもしれないと思えてきた。これからも頑張っていくのでご支援をお願いいたします」と発言を締めくくりました。

第22回多田謡子反権力人権賞候補者推薦のお願い

2010年7月1日

多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記の要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

記

- ・賞の内容 多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈
- ・選考基準 国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体
- ・推薦方法 候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。
- ・推薦締切 2010年9月30日
- ・推薦受付先 〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目8番1号
出雲ビル4階 東京銀座総合法律事務所内
多田謡子反権力人権基金運営委員会
TEL 03-3573-7737 FAX 03-3573-7189
e-mail web@tadayoko.net
お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

本年も12月11日に受賞発表会を開催します。

2010年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせいたします。)

- 12月11日(土) 午後2時から5時まで。その後同じ場所でパーティを行います。
- 総評会館201号室 (東京・中央線お茶の水駅より徒歩5分)

基金継続のための寄付のお願い

基金では、闘い続ける人々を励まし続けよう、共に闘い続ける意志を表明しようという趣旨に賛同される皆さんからのご寄付をお願いしています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】 口座番号 00110-2-356484 口座名称 多田謡子反権力人権基金